

[声明]

学術の場にふさわしく、人を大切にするリーダーシップを ！！ ～次期北海道大学学長の選出に臨んで～

国立大学法人に移行して7年近くが経過しましたが、政府の行政改革方針により学術関係の重点予算が大幅削減され、また運営交付金の定常的削減が事実として残っています。いま、政府の徹底した教育軽視と大学側の無策な戦略ミスとが重なって、国立大学法人の前に暗雲たる雰囲気立ちこめています。このような状況のなかで、北海道大学の将来を担う新学長の選出が行われつつあります。対立候補のいない再任手続きに向けた所見表明において現・佐伯浩学長は、大学の使命と第2期中期目標の中心課題を述べていますが、ここで組合として指摘しておかなければならないのは、組織論の基本、すなわち「組織とは人である」という中心命題の再確認です。学長の指摘するように教育・研究の多様化、国際化に対する教職員各人の創意工夫と努力はもちろん大切ですが、人のもつ潜在力と創意工夫が最大限に発揮されるのは、人の行いが正しく評価されたときである、ということです。これは、教育に関わる者、子供を育てたことがある者であれば誰でも知っているはずですが、しかるに北海道大学は、北海道大学に働く教職員を正しく評価していません。

法的、論理的根拠の無い非正規雇用職員の3年期限はその最たるもので、本来能力のある人を確保するための流動化であるはずが、能力のある人を意味もなく手放す事態を強要する愚策となっています。また社会に蔓延する類似の雇用形態は、国の最も大切な資産であるべき若者の将来展望やプロフェッショナルになる機会を奪い、貧困を強要することで、家庭を持ち、子を育てるといふ国家存立の最も基本的な要件である人的再生産をも不可能にしています。これは学生の就職問題や高等教育のあり方を語る以前の、根本的な社会的視点の欠落によるものですが、最高学府を自負する北海道大学が率先して同じ愚策を推進していることに、無知の根深さを感じざるを得ません。北海道大学は、日々学生に接して重要な業務をこなしている非正規雇用職員を理由も無く、いとも簡単に切り捨てることで、学生に対してこの国の非情さ、将来に対する無策と不安を見せつけていることに何故気付かないのでしょうか。授業評価で教育改善に参画できるという夢を学生に与える一方で、非正規雇用職員がどんなに努力して優秀な成果をあげても期限で切られる厳しい現実を示すことで、学生に対して安易な夢を見ないようにと教えさす教育上の深い配慮のつもりなのでしょうか。

組織運営の本質は、各人の潜在力を適材適所で最大限、発揮させることにあります。大学であれば、教育者、研究者、学生、これらをサポートする事務職員や技術職員、あるいは関係する企業体などが有機的に結びつくことで、効率的な教育、研究が可能となります。しかるに北海道大学では、教員が1日の半分を物品購入や出張申請などの事務作業に費やし、学生とのディスカッションもままならないという現実があります。これは北海道大学が自負する人件費削減方針によってもたらされた悲惨な結果です。こうして生じた運営費交付金の剰余金や外部資金を多額にプールする一方で、本来人を育て、長期的、学術的戦略に投資すべき財政を、先の見えない場当たりの局面に費やしています。北海道大学のこのような有り様は、自身の血肉を削って短期的な快楽に費やしている末期病理的症状と重なります。現在北海道大学はノーベル化学賞の受賞に沸き立っていますが、その一方で教育者・研究者に多量の雑務を与えて疲弊させ、能力の発現を抑制し、短期的な業績と際限のない資金獲得に奔走させることで、本質的、長期的な学術の世界から遠ざかせています。すなわち現状の北海道大学は、偉人諸先輩の過去の遺産を食いつぶすことで、短期的な見かけの営業成績をつくり出そうとしているのです。これは、将来展望をなくした組織体の末期状態に酷似しています。北海道大学が国際ランキングを落としているのは評価基準が変わったからだ、という議論もありますが、現実を直視する勇気が必要です。

北海道大学が大学であり続けるためには、学術的立場からのリーダーシップが必要不可欠です。北海道大学は第一義的には教育・研究機関であり、これがこの組織の本質です。次期学長は、学術・教育を先導すべき立場をもう一度再認識し、真のリーダーシップを存分に発揮してほしいと切に願います。

2010年12月2日

北海道大学教職員組合